













「なっ！？ お前……俺の上で何をしてんだ！？」

リユーヴは驚愕した。目覚めると、リユーヴ自身の上に知らない女性が馬乗りになっていたからだ。

しかも、馬乗りになっているだけならまだしも、リユーヴと結合しているとあつては、リユーヴは正気ではられない。

「や、やめっ……ひうつ、ぐ、あああっ！！」

せっかく、成績上位を維持する為に、オナ禁中だったのに、これでは水の泡である。

「ターニヤ様、リユーヴが目覚めたようです」

馬乗りになって、身体を揺すり上げている女性が言う。

「ターニヤ？ ターニヤってまさか、この魔法学校で……ああうつ……2番目の成績のターニヤか！？」

「その通りよ。察しがいいじゃない、リユーヴ」

冷やかな笑いが、リユーヴの鼓膜を揺らす。

視線を上げる。

この部屋は、この魔法学校の内部にある図書室じゃないか。リユーヴは思った。

そうだ。確か、今日は下駄箱に手紙が入っていて、図書室に来るように、って書いてあったんだ。差出人不明だったのが、気がかりだったが……。

リユーヴが上半身を起こそうとすると、リユーヴの上に乗って腰を振っている女性に、肩を抑えつけられた。

「ターニヤ様と顔を合わせようとするなんて、リユーヴのようなお子ちゃまには、恐れ多いね」

がつがつと、リユーヴの性器に腰を打ち据えて、恍惚に顔を緩ませている女性。

その女性に二本の黒い角が生えていることに、リユーヴは気付いた。

「お前……人間じゃない、のか？」

「私は、セサ。ターニヤ様に召喚魔法で呼び出されたサキュバスさ」

「……サキュ、バス」

その魔物の名前は、聞いたことがある。

寝ている男性に淫らな夢を見せ、関係を持つという淫魔の名前だ。

ある程度、魔法を唱える能力を持った者が、上級の召喚魔法を唱えなければ、出現しないだろう。

「何故、その淫魔を呼び出して、こんな真似をするんだ！？」

リユーヴは、この部屋に居るであろうターニヤに向かって叫んだ。

しかし、その問いに答えたのはセサの方だった。

「そんなこともわからないのかい？ ターニヤ様はね、あんたが妬ましかつたんだよ！」

「妬ましい？」

「リユーヴが童貞というだけで、この魔法学校1、魔力が強いという事実がターニヤ様

を悩ませたんだ」

リユーヴの住む世界では、純潔であればあるほど、自身の魔力が強いとされている。それとは逆に、積極的に性行為をして、射精をしてしまう回数が多いほど魔力は衰え、弱くなってしまふ。

そんな世界で、リユーヴは童貞を貫いていたのだ。

どんなに性欲が強くなった日があっても、オナニーをするのを我慢し、学業に重きを置いた。

その甲斐あってか、リユーヴの通う魔法学校では、リユーヴが主席となっていた。

しかし、そんな名誉ある時間も終わりに近付いている。

何故なら、リユーヴは童貞を失ってしまったのだから。

それに、このままセサの逆レイプが続いたら、リユーヴは否応無しに射精してしまうだろう。

「リユーヴの童貞を奪ってやれば、ターニャ様がこの魔法学校で1位の座に就くことができるのだ。大人しくこのまま童貞を奪われるんだな」

セサの腰の動きが更に速くなる。

「んはあっ、や、やめ、それ以上したら、イってしまおう!!」

「ふふふっ、射精感を抑える必要なんて無いんだよ?」

ぐちゅぐちゅと卑猥な音が、結合部から奏でられる。

何故だ?

リユーヴは、込み上げてくる射精感を堪えて思った。

いくら上に乗っかられているとしても、相手は女性だ。

退けることくらい簡単はずである。

しかし、リユーヴの考えに反して、リユーヴの身体は動かなかった。

「ふふっ……気付いたかい??」

不意にセサが笑う。

「……俺に、何をした?」

「金縛りの魔法をかけたのだ」

金縛りの魔法……。道理で身動き一つ出来ないわけだ、とリユーヴは悔しく思う。

「金縛りを解いてくれ」

「だーめ! 金縛りを解いたりしたら、召喚魔法を使うつもりでしょ?」

リユーヴからは姿が見えないが、ターニャの声が聞こえる。

「う」

リユーヴの浅はかな考えは、お見通しだったようである。

「さあ、リユーヴ。私の為にいっぱい射精してね。セサ、私は見物させてもらうわ」

「わかりました、ターニャ様」

言うのが早いか、行動に移すのが早いか、セサはラストスパートを掛けるかのようにリユ

ーヴの男根に腰を何度も沈めた。

くそっ、誰がイってやるか！

そうは思ってみても、リユーヴの我慢はあつという間にやってくる。

「うあつ、あああああ！　イクイクイク！！」

リユーヴの脇の裏はチカチカと閃光が走って、脳天に響くような快感がリユーヴの身体を支配する。

どびゅどびゅどびゅっ。

最近、マスターベーションをしていなかったから、濃い精液が絞り出された。

「クスクス。リユーヴ、童貞喪失おめでとう」

ターニヤの笑い声が聞こえる。その声は、心底この状況を愉しんでいるかのようだ。

「ほらほらっ、休んでいる暇なんて、無いよ！」

リユーヴがいったばかりの身体を休めようとしたら、セサの膣内がリユーヴの未だ衰えない陰茎をきつく包んだ。

「んなっ！？」

「ふふっ、驚いたかい？」

「力が……抜ける……？」

「私はサキュバスだよ？　交わった箇所から相手のエネルギーを吸収することなんて、造作も無いことなのさ」

今まさにセサの膣がリユーヴの精液を搾精しているのだと思うと、リユーヴは底知れぬ恐怖を感じた。

「ターニヤ！　こんなこと、やめさせろっ！！」

「やめさせる？　ターニヤ様に向かって、何て口の利き方なんだい！！」

「あうっ！」

セサの指先がリユーヴの胸板にある突起を摘まむ。

「あら？　リユーヴ、乳首をつねったら私の中にあるおちんちんが跳ねたようだよ？」

「ううっ」

リユーヴは押し黙る。セサは満面の笑みを向けてくる。

マゾだということ。それは、リユーヴが一生をかけて隠しておきたい秘密だった。

セサはそれをもう一度確かめるために、先程よりも強く乳首に爪を立てる。リユーヴの秘密を、いとも簡単に暴こうとする。

「ぐっ、そんなことしても痛いだけだっ……！！」

リユーヴは怒鳴った。

しかし、どんなに言葉で欺こうと思ってみても、身体は正直である。

セサの中のリユーヴのペニスは、更に快感が欲しいようで、ズキンズキンと脈打っている。

リユーヴが黙っていても、それはセサに伝わったらしい。セサがにんまりと口元に笑みを携えた。

「ターニヤ様、リユーヴは真性のマゾのようです」

「え、そうなの？　いくこと聞いた！」

セサの報告に、ターニヤは気を良くしたようである。鼻歌まで歌いはじめた。

「セサ、リユーヴを休ませないで。立て続けにどんどん射精させちゃって！」

「わかりました、ターニヤ様。……リユーヴ、覚悟しな」

セサは、そこまで言うのと、リユーヴの両方の乳首に爪を立てながら、腰を上下させる。

「いひいっ！　ぐ、がっ……はあ、んんん」

男が喘ぐなんて。こんな屈辱的なことは無い。

しかし、それとは同時に、もっとして欲しいと思っているリユーヴがいた。

「リユーヴ、本当にマゾなんだね。こんなに乳首を弄られて、私の中で勃起させるなんて」

セサの煽るような声が近くで響く。

それに便乗するかのように、ターニヤが嗤いながら言った。

「ふーん。リユーヴって本当にセサの言うようにマゾなんだ？」

「ええ、リユーヴのいちもつがカチコチに固くなっています」

「まさか学校の主席が、こんなにド変態だったなんて、思いもよらなかったわ」

「う、うるさい……！　だったら、どうだっていうんだ……！」

感心しているターニヤに向かって、リユーヴは吠える。

「リユーヴ！　ターニヤ様に何て口の利き方を……！」

「まあまあ、そんなことはどうでもいいわ。それよりも、リユーヴ。ド変態だってことを否定しないのね」

「……くっ」

悔しいが、言い返せない。

ド変態だと言われたことで、リユーヴの体はより一層疼いていた。

「ターニヤ様、リユーヴは言葉でいじめられるのも好きなようです」

セサはリユーヴと体を繋いで、直接肌で感じ取ったのか、リユーヴの変化に目ざとく気付いた。

「……へえ、面白いじゃないの。リユーヴったら、へ・ん・た・い、なのね」

ターニヤが、わざとらしく、強調するように言う。

その度に、セサの膣内にあるリユーヴの男根は、びくびくと主張した。

先程イッたばかりのリユーヴの陰茎が更に刺激され、つらさと快感がない交ぜになる。

セサの牝から、汗が止め処もなく流れ、リユーヴの汗と一緒になっていく。

「もお、だめだっ、あひいっ、いくうっ……！！」

リユーヴの2発目が、セサの子官口に直撃した。

「ふふっ、リユーヴの元気な精液が、私のエネルギーとして浸み渡っていくわ」

セサが感嘆とした声を漏らす。

「はあはあ……もう十分満足したろ？　解放してくれ！」

リュウヴはあまりの快感に涙交じりに訴えるが、セサはリュウヴの身体の上から退く気配など毛頭無いようだ。

「ターニヤ様、リュウヴの魔力も大分小さくなったようですが、まだまだ続けますよね？」

「ええ！ これからが本番なんだから♪」

二人は、顔を突き合わせると、にんまりと笑った。

いったばかりのリュウヴの男根を、セサの膣内が尚も刺激する。

射精を促されて、あつという間に3発目も出してしまった。

「感じるわぁ〜♪ 私の子宮口にどばどばと迸るリュウヴの精液が」

これだけ射精すれば、精果が空っぽになってしまうような気分になる。だが、リュウヴの男性器からの吐精は、際限が無い。

先っぽからは、次から次へと精液が出て行く。3発目は、断続的に長く放出された。

無限に続くかと思われる搾精行為に、リュウヴは恐れおののく。

「リュウヴったら、震えてるのかい？ 可愛いね」

嬉々とした声を上げて、セサがリュウヴの頬を撫でる。

「もうやめろ！ こんなことをしても惨めになるだけだぞ！！」

「惨めになる？ 一体誰がだい？？ まさかターニヤ様のことを言っているんじゃないだろうね？」

リュウヴの訴えに、セサの表情がきつくなる。

「それに、口の利き方がなっていないよ」

リュウヴのくせに、と言いながらセサは、リュウヴの陰茎を締め付ける女性器の力に強弱をつけた。

「くふうっ……うあ、あ、あ、あつ、お願いだ、やめさせてくれえ、ターニヤッ……！！」

「ふふっ、それじゃあねえ、このオムツを履いて赤ん坊の真似をするんなら、搾精を一次的にやめてあげてもいいよ？」

「なっ！ 誰がそんな真似をするか！！」

リュウヴは、頭に血が上ったように叫ぶ。

「ふ〜ん、そんな口を利いていいと思ってるんだ？」

ターニヤは、興醒めしたように呟いてから、セサに目配せした。

「ひいひい……くっ、はああ……！！」

セサが、奥まで入っていたリュウヴの竿を、急に入り口付近まで抜いたかと思うと、また一気に最奥まで押し入れた。

あまりの快感にリュウヴの口角からは、唾液が零れる。

その唾液をセサが舐めとりながら、腰をグラインドさせる。

「お、おっ、お願いだ！ やめさせてくれっ、なんでも、するから！」

「お願いします、でしょ」

「お願い、します……」



「……で？ 何をお願いするの？」

ターニヤの冷淡な声が室内に響く。

「もう限界なんだ」

「じゃあ、どうすればいいか、分かるでしょ。さ、早くして」

素っ気ない態度のターニヤ。セサは、ただニタニタと笑っている。

悔しい。あんなに能力のあったリユーヴは、今や反抗することの出来ないマリオネットと化している。

リユーヴは唇を噛んで言った。

「……オ、オムツを……」

「なに？ 聞こえない。もっと大きな声で言って頂戴」

「オムツを履かせてください！！」

「お願いします、も忘れないでね。リユーヴ」

「お願いします……オムツを履かせてください……いい！！」

「ターニヤ様、聞いてください。いま、リユーヴのおちんちんがガチガチに勃起してます！あ、またせーえきが出ちゃったみたいです」

「ふふっ、リユーヴったら、本当にド変態なんだから」

クスクスと笑った後、ターニヤはリユーヴにオムツを履かせていく。

リユーヴの上からセサが退いた代わりに、ターニヤが抑えつける。

この時も金縛りは解いてもらえなかったから、為されるがままである。

動けない状態で、女性にオムツを履かせてもらうなんて、本当に赤ん坊になったような気持ちになる。

リユーヴは恥ずかしさと、そんな複雑な思いを抱きながら、オムツを履かされた。

「はい、リユーヴ。履かせたよ。嬉しい？」

「嬉しいわけね……」

そこまで言っただけ、リユーヴはハッとした。

また反抗的な態度を取ったら、ターニヤ達に何をされるか。容易に想像できたので、改めて言い直す。

「……嬉しいです」

「リユーヴったら、良い子ね。ちゃんと従順になれるんだから♪」

そうターニヤに言われて、ホッとした胸を撫で下ろすリユーヴ。

だが、次に言われたターニヤの言葉に、リユーヴはギクリとした。

「でも、心から喜んでるんじゃないさそうね、リユーヴ」

「な、何で……俺は心から喜んで……」

「ターニヤ様の前で、嘘なんか吐いてもバレてしまうのさっ」

セサの鋭い目に射ぬかれて、リユーヴは何も言えなくなってしまう。

先を読んだ言葉だったのに。失敗してしまった。

「嘘吐いた罰よ、リユーヴ。赤ちゃん言葉で、復唱なさい」

「ふ、復唱……？」

『僕はオムツを履くのが大好きなんです……はい！』

「ほ、僕はオムツを……」

「ほそほそ言わない！ 大きな声で……！」

「僕はオムツを履くのがだいしゆきなんですうう……！」

『オムツを履いているだけで、勃起してしまいます……はい！』

「オムツを履いているだけで、勃起してしまいましゅう」

「その調子よ……『ド変態で、すみません。もっと言葉責めしてください』」

「ド変態で、すみません。もっと言葉責めしてください」

「言われるがまま、リユーヴは叫んでいた。」

もう、倫理観もへったくれもない。

ただひたすらに、ターニャに反抗しないように努めることに必死になっていた。

すると、急にセサが声を上げる。

「ターニャ様、本当にリユーヴのおちんちんが勃起していますわ！」

その声に、自身のいちもつを見たリユーヴは、あつと声を上げそうになった。

オムツの上からでも分かるほど、そこは猛々しく盛り上がっている。

「とんだド変態ね、リユーヴ」

煽るようにターニャにそう言われる度に、ぴくんぴくんと自己を主張しているリユーヴの性器。

それを見たリユーヴは、羞恥と屈辱感に支配される。

今すぐにも、攻撃的な召喚獣を召喚して、ターニャとセサを消してしまいたい。

もしくは、こんな辱めを受けた行為を倍返しにして返してやりたい。

一瞬、リユーヴの脳裏に、そんな破壊めいたことが過ぎる。

しかし、射精を何度もして、能力の下がってしまったリユーヴでは、高等な魔法はおろか標準の能力の者が扱える魔法でさえも、使えなくなっているに違いなかった。

だから、リユーヴは自分に起きた出来事にショックを覚えて、黙り込んだ。

「リユーヴ、そんな悲しい顔をしないで。これから、もっと素敵なことが起こるんだから――。そう、もつと素敵なことが、ね」

ターニャの笑みは、深く、この先の不安を煽るような笑みだった。



あれからリユーヴは、サキュバスであるセサに憑りつかれ、毎日搾精されていた。

「ほらほら！ 休むんじゃないよ、リユーヴ！！」

授業が終わると、否応無しにターニヤの部屋に呼び出される。

部屋に行けば、まるで搾精されるだけの人形のような扱いを受ける。

拒否権など無い。ただひたすら、行為を強要されたり、罵られたりするのだ。

そんな行為にリユーヴの身体は悦んでいたが、心は悲鳴を上げていた。

そんな毎日に、嫌気が差していた。

「自分が何をしたか、分かっているのかい？」

リユーヴの童貞を奪った相手は、睨み付けるような視線を向けてくる。

リユーヴは、う、と短く呟いて萎縮した。

実はリユーヴは、そんな毎日に耐えきれず、逃亡を図ったのだ。

逃亡は成功するはずだった。だが、リユーヴが呼び出された場所に行かなかったことは、憑りついているセサによって、ターニヤにすぐに知らされたのである。

「その様子だと、悪いことをしたという認識はあるようね？ 覚悟はいいかしら？」

ターニヤが冷ややかにリユーヴを見下ろして、セサに指示を出した。

リユーヴの上に馬乗りになっていたセサは、小さく頷くと、搾精に没頭していた行為を一層強くした。

リユーヴは、たちまちイきそうになって、息を飲んだ。

「も、もう無理だよおっ……ひううっ、許してくれええ」

「許して『ください』でしょ。リユーヴ。学習しないオツムね」

ターニヤの足の裏が、リユーヴの顔を踏む。

「許してくださいいいっ、お願いしますううう」

情けない声と醜態を晒しているのは、分かっている。

でも、リユーヴはそうしないといけないのだと、自ら悟っていた。

そして、当然許してもらえるものだと思っていた。しかし――。

「……駄目よ。一度、現実から逃げようとした人間は、また逃げようとするわ」

リユーヴとセサの行為を傍観していたターニヤが言う。

「逃げグセが付く前に、リユーヴの性格を矯正しなきゃいけないの。分かる？」

「もう逃げない……逃げないからああ」

「口では、何とでも言えるわ」

「……そんなあ、あひいい……もお、いやだあああ！！ 精液を出し過ぎて、先っぽがじんじりするよおっ」

あまりの快感が続き、半べそをかいている状態のリユーヴ。

セサが腰を押し付けて、受精する。セサの最奥では、リユーヴの精液がどくんどつくと脈打っている。

「うふふ、リユーヴ、またイっちゃったのねえ。これで7回目よ♥」

セサが虚ろな表情のリュージュに言っただけ聞かせる。

だが、いったばかりのリュージュの視点は定まらない。

言葉が聞こえているかどうかさえ、定かではないようだ。

その様子を見たターニヤが鼻で笑った。

「口では嫌がっているけど、身体は正直みたいだね」

「そのようですね、ターニヤ様。リュージュは、あまりの快感に昇天しそうになっていますね」

二人は顔を合わせてほくそ笑む。

「このままいくと、ターニヤ様が主席になる日も、遠くありませんね」

セサがそう言うと、ターニヤは胸を張った。

「もちろんよ！　だって、そうなるためにリュージュを手籠めにしているんですもの！！」

リュージュは、そんな二人の会話を薄らいでいく意識の中で聞いていた。

この二人の会話が現実のものになったのは、数日後のことである。

魔法学校の廊下にある、掲示板に貼り出された1枚の横長い紙。

そこには、学校主席である1位から、最下位まで、学生の名前がずらりと並んでいる。

1位は、ターニヤ。注目的になれたことは、彼女の目論見通りである。

そして、最下位は……リュージュ。

周囲の人間は、リュージュが最下位になったことに吃驚していた。

どうしたんだ、と心配する者。

さあみろ、と陰口を言う者。様々だ。

リュージュは、掲示板を目にして、足元から崩れ落ちた。

セサの搾精と、ターニヤの嘲笑を受けはじめてから、かなりの期間が経っている。

毎日のように、搾精行為を受けていれば、こうなることは必至。

だが、リュージュはほんの一縷の望みにかけて、成績が下がっていないことを願っていた。

学校内で、学校主席だ、と羨望の眼差しで見られたり、握手を求められたり、喝采を受けたり……そんな誰しもが憧れる学校生活の思い出が、走馬灯のようにリュージュの脳裏に駆け巡る。

「あーら、『元』魔法学校主席のリュージュ。そんな青褪めた顔をして、どうしたの？」

声に振り返ったリュージュは、顔を強張らせた。ターニヤ。

リュージュは、自分の成績を最下位まで下げられた元凶を目にして、押し黙った。

「元気なさそうね、クスクス。それはそうよね……主席が最下位になってしまったんですもの」

殺してやりたいほど、憎い。この女が。

リュージュの心に、以前抱いた気持ちたちが再燃してくる。

最高位の魔法で八つ裂きにするか、火だるまにして消し炭のようにしてやりたい。

しかし、そう思ってみても、今のリュージュでは分が悪過ぎる。

主席と最下位では、能力に差が開き過ぎている。

「なあに？ 体調が悪いなら悪いって、言いなさいよ」

「別に体調は悪くねーよ！」

「……だって顔色が悪いわよ？ 無理しないほうがいいわ」

「放っておけよ！！」

伸ばされた手を思わずはいていた。

なーにが、無理しないほうがいいわ、だ。

毎晩のように俺に無理させてたのは、お前と、お前のしもべじゃないか。

睨み付けるような視線を投げ掛けるリュージュを見て、ターニヤは不穏にも笑っていた。

「セサ。リュージュは、体調が悪いようよ。保健室に連れて行ってあげましょう」

「了解いたしました、ターニヤ様」

いつの間にか、背後にはセサが待機しており、リュージュは焦った。

「お、おい……これから授業があるんだぞ！」

「だから、よ。授業中に倒れたら、困るでしょ？」

満面の笑みを向けられて、リュージュは後退る。

すると、背後のセサがリュージュの腕を掴んだ。

空いているもう片方の腕をターニヤが掴み、歩き始める。

「私は、リュージュを保健室に連れて行って看病する、って先生に伝えといて頂戴」

ターニヤは、学生の一人に声を掛けた。声を掛けられた学生は、話し掛けられたことに舞い上がっているようで、嬉しそうに返事を返している。

廊下を通り過ぎる度に、教室内で聞き耳を立てていた学生達が、教室から出てきてターニヤに羨望の眼差しを向けている。

きつと、ターニヤの行動を見て、こう思ったに違いない。

なんて心優しい人物なのだ、と――。

だが、リュージュはターニヤの本性を知っていたから、両手放して喜べないでいた。

それどころか、ターニヤが優しくするのは、何か裏があつてのことなのだと、恐怖心を抱いていたのである。

ターニヤがにこにこ笑みを浮かべる度に、リュージュはびくびくとしながらついて行った。

「おい、ここは保健室じゃ――」

ないぞ、と言おうとしたら、逸早くリュージュの腕から手を離れたセサが、リュージュの背中を蹴った。

「うわっ！？」

思わず、顔面からこけそうになるのを、両手を突っぱねて防ぐ。

「何すんだよ！」

セサを睨み付けて叫ぶと、まつ毛の長いセサの瞳がリュージュを睨んだ。

「前にも言ったわよね？ ターニヤ様に対して、口の利き方がなっていないって。どうして、

直してないんだい？」

「う、うるせえな！ 俺は虫の居所が悪いんだよ！！」

「ターニヤ様。リユーヴのこの態度、どう思います？ 嬬が必要とは思いませんか？」

セサは心配するような眼差しを、ターニヤに向ける。

「そうねえ。今日は、気分がいいから、多少の無礼はよしとしましょう。……でも、嬬は必要ね」

ターニヤの視線が、転んだままのリユーヴを捉える。

口の端をつり上げて、にっこり。そんな笑みをリユーヴに向けてくる。

不穏な空気を感じ取ったリユーヴが、お尻を床に付けたまま後退る。

すると、それに合わせてターニヤとセサもリユーヴに近付いて行った。

「最近、ずっとセサとのセックスばかりで搾精しているから、ちよっと飽きてきたわね」

「ターニヤ様、リユーヴがマゾということは、お尻叩きだけでも勃起・射精するのではないでしょうか？」

「なるほどね、面白い提案だわ。早速、実験してみましよう。セサ、金縛りの魔法よ」

「はい、ターニヤ様」

セサが短い呪文を唱える。あつという間に、リユーヴは身動き一つ出来なくなってしまった。

「くそ……！ 主席になったのなら、目標は達しただろう！？ これ以上、何を求めるっていうんだ！！」

ギラつとした視線で睨み付けてみても、リユーヴが弱者なのは変わらない。

「リユーヴ、私はね。貴方がずっと私の下僕的存在で居ることに安心するの。これから、ずっと……一生ね」

「なっ！？」

驚くリユーヴの服に手を掛けると、ターニヤは一枚一枚脱がせていく。

痛みという快楽を与えてくれる主と、それを受け入れる下僕。

そんな関係、リユーヴが承諾するはずなかった。だが、定期的に快楽を与えてくれる存在に、リユーヴの心は多少揺れる。

そんな最中、あつという間に真っ裸にされたリユーヴは、オムツを履かされた。

「さあ、リユーヴ。出来たわよ♥ やっぱリユーヴにはオムツが似合うわね」

ターニヤにそう言われて、リユーヴは恥ずかしくなる。

大の大人がオムツを履いているのである。

常識的に考えて、高齢者でなければ、変態の域に達しているだろう。

「ふふっ、自分の変態加減さを悔いているの？ 今更ね」

ターニヤに鼻で笑われ、屈辱感でいっぱいになるリユーヴ。

「ほら、反抗できるものなら反抗してみなさいよ」

「ぐうっ……！！」

ターニャにお尻を蹴られて、くぐもった声が漏れる。

痛い！ これまでに感じたことの無い痛みが臀部に走る。

それが二・三回と続き、リユーヴは涙目になった。

痛いの……。それなのに、リユーヴのあそこはズクンズクンと疼きはじめる。

「痛いから、やめてくれっ……！」

痺れるような快感。それを隠すために、リユーヴは叫んだ。

「痛い？ ……嘘ね。リユーヴ、貴方はマゾでド変態なのよ。隠そうとしても無駄なことよ。ねえ？ セサ」

「はい、ターニャ様。リユーヴの変態は、もう確証できるものですし、これからも変えられることはできません」

二人でリユーヴの悲痛な顔を見て、嘲笑う。

リユーヴは悔しくて悔しくて、言い返してやりたかったが、睨むことでしか自分の感情を表せなかった。

痛くて……でも、気持ちよくて……。

その気持ちを透かすように、セサが言った。

「リユーヴ。それにしてもアンタはマゾの分際で、今までターニャ様に生意気な態度をとっていたよね？ 罰としてお尻叩きだよ！ さあ、土下座したままオネダリしな！！」

「い、嫌だああ」

そんな格好でオネダリするだなんて。そんなの恥ずかし過ぎるし、屈辱的だ。

リユーヴは駄々っ子のように、イヤイヤとかぶりを振る。

すると、ターニャが言った。

「貴方は自分の置かれている立場ってものが、分かってないみたいね」

言い終わるぐらいに、またターニャがリユーヴのヒップを蹴り上げる。

「うあんっ、痛ぎもちいいいい！！」

「……ほら、ね。思わず本音が出たわ。クスクス」

ターニャに嗤われて、恥ずかしいのに、それよりもっと立て続けに快楽が欲しくて、土下座をしながら、腰を揺すってしまった。

「お願いしましゅうっ……僕のお尻をめいいっぱい叩いてくださいいいいい！！」

「めいいっぱいって、どの程度なの？ 言いなさい」

「僕のお尻が真っ赤に腫れ上がるくらいですううう！！」

「リユーヴ、良い子ね。よく言えました」

ターニャはそう言うと、リユーヴのオムツを取り除いた。

「あら、リユーヴったらオムツが先走りでべとべとになっちゃってるわよ」

「本当ですね、ターニャ様。これを見るだけでもリユーヴの変態度合が分かるというものです」

ターニャとセサは、顔を突き合わせて、揶揄している。

「見て。おちんちんには、全く触れてないのに、こんなにギンギンにさせているわ」

「うわあ、すごい勃起していますう。こんな変態、見たいこと無いですよねえ、ターニヤ様あゝ」

「そうね。……さて、リユーヴ。覚悟はいいかしら？」

「ひゃ、ひゃいいい、お願いしましゅうう！！」

リユーヴの動悸は、今からお尻を叩かれるという期待感で、最高潮になる。

ターニヤは、リユーヴの腰を抱えると、膝の上でリユーヴのお尻を叩き始めた。

パアアンツ

「あひいいいっ！！」

パアアアンツ

「もつとつ、もつとお……あああああ！！」

ターニヤが叩く度に、リユーヴの腰は跳ねた。

リズムカルに音が鳴り響く。

始めはビリリとした痛みが走ったが、何度も叩かれている内に、リユーヴのお尻は熱くな

ってくる。そして、いつしか、蕩けるような感覚に支配されていた。

パシィツ パシィツ

乾いた音が、何度も室内に反響する。

「リユーヴ、私のペニバンにフェラをしな」

気付くと、リユーヴの目の前には、セサがペニバンを付けて立っていた。

「んぐうつ……ぐえつ」

有無を言わず、リユーヴの口腔内にペニバンの先を突っ込まれ、リユーヴは軽くえずく。

まさか女性が男性にするようなことを自分がやらなければいけないとは――。

リユーヴは穴があつたら入りたいような気持ちになった。

こんなところを誰かに見られたら、と思うと恥ずかしくて堪らない。

でも、現状に興奮しているリユーヴも確かにいた。

「もつと奥まで、銜えるんだよ！！」

セサの手がリユーヴの頭の髪を掴む。

言われるがままに、喉の奥まで銜え込んだ。

パンツ パンツ パンツ

それと同時に、ターニヤがお尻を責める。



「うあああああ、イクっ……イクううっ!!」

脳天に突き抜けるような快感が、リュージュの射精を促した。

どっぴゅううう　びゅくびゅく

「まずは、一発目♥」

「ターニヤ様、リュージュを立て続けにイかせましょう♪」

セサの提案にターニヤは、賛成よ、と言ってまたリュージュのお尻を叩き始めた。

「いひいひいひい!!　きもち、い、い、イっちゃううう!!」

お尻がカアアッと熱くなる。震えが止まらない。

先程、イったばかりなのに――。

どくどくどく

リュージュの鈴口から、垂れ流れるように精液が零れていく。

それをセサが指で掬い取って、自らの口に運んだ。

「リュージュの精液は、熱くて、濃くて、美味しいな♥」

リュージュは、射精後の疲労感から、はあはあと肩で息を繰り返す。

しかし、その時間もまたすぐに終わってしまう。

セサがペニバンを銜えさせ、ターニヤがお尻叩きをする。

その行為は、何度となく繰り返された。

リュージュが、もうやめたいと思っけていても、止まることは無い。

お尻を叩かれ、イク。言葉で責められ、イク。ペニバンを銜えさせられ、イク。

地獄のような、天国のような、そんな時間が続いた。

「うくう……!!　お尻をいっぱい叩かれて、イっちゃう、イっちゃうよおおお!!」

「これで、丁度10回目ね♥　たくさんイったわね、リュージュ♥」

平手でスパンキングを繰り返され、気付けば10回もイっていた。

リュージュの視線は虚ろになり、口の端からは涎が止め処も無く流れていく。

頭はクラクラとし、ふわふわと空を飛んでいるようである。

「リュージュ、これで終わりだなんて思わないでね」

「う、うう、あ、う……」

いき続けたせいで、発言もままならない。

リュージュの脳内はぼんやりと霞がかっていた。

ターニヤが言った。

「お楽しみはこれからなんだから――……聞こえてないかもしれないけど♥」



『貴方を魔力祭に出品することにしたわ』

そうターニャから聞かされたのは、この魔法学校の卒業式である魔力祭がある前日の夜になつてからだつた。

魔力祭とは、卒業式及び、卒論の発表の場に近しいものである。

その場に来る者は、この魔法学校の学生は勿論のこと、魔法が使えないような一般人も大勢集まることになっている。

「魔力祭に出品って……どういう事ですか？」

あれから学校の授業が終わらなくても、お昼休憩や授業中に抜け出させられて、搾精行為を強要させられたリュージュは、ターニャやセサに対して敬語を使うようになっていた。

「教えて欲しい？」

「はい、教えてください」

『『こんなオツムの弱い僕でも分かるようにお願いします』って土下座したら、教えてあげる♡』

「こんなオツムの弱い僕でも分かるようにお願いします……」

ターニャとセサの、リュージュへの対応はこれまでと変わらない。

リュージュは、というと、反抗的だった態度は改めさせられ、一人称だった『俺』は『僕』になっている。

頭を床に擦りつけんばかりに深々と下げ、ターニャの言われた通りにしている姿は、従順そのものである。

いわゆる、調教させられた、というやつだろうか。

これまで、嫌がっても止めてもらえはらずもなく、精液を絞り取られ、無限とも思えるような辱めを受けた。

それでも自分自身は、しっかり持っていなくてはと思っていたリュージュであったが、幾度となく繰り返される快楽の波に、いつしか溺れていた。

そんなリュージュの心にあった、最後の自尊心の糸がぶつりと切れてしまったのはつい最近である。

それなりにプライドの高かったリュージュだったが、今ではどうだ。そのプライドは最低限のラインまで下がってしまったのだ。

「搾精されて、魔力が下がり続けるマゾとして、出品することにしたのよ」

「そ、そんなあ……」

ターニャの発言に、リュージュは情けない声を出す。

「なに？ 私のすることに文句があるって言うの??」

「い、いえ……そんなことはありません……」

「私に対して文句が無い、っていう証拠を体で示さない」

「ど、どうすればいいんですか？」

「オムツ越しに、おちんちんを床に擦り付けてオナニーしなさい」

昔のリュージュだったら、反抗的な目をして、ターニヤを睨んでいたことだろう。だが、いまのリュージュは人格まで変わってしまったように思えるくらい、萎縮してしまっている。

「……わ、わかりました」

リュージュはターニヤの機嫌を取りたくて、慌てて床に性器を擦り付けた。オムツ越しに床の硬く少しひんやりとした感触がする。

「あ、あ！んはあ、っ、う、ん、んっ……！！」

何度も繰り返していく内に、じんわりとした熱と、悦楽がやってくる。

「……で、私のやることに文句があるわけ？」

「い、いえ、ありませんっ……」

「嘘ばかり。そんな嘘つきちゃんには、『罰』を与えるわ」

罰。その言葉を聞いた途端、リュージュの顔色がサアッと変わった。

まるで、血の気が引くような感じである。

今まで『罰』という単語は、何度となく耳にした。

その度に、リュージュは地獄のような味わいを受けていた。

と言っても地獄のような、の前に『一般人にとっては』というような表現が付く。

リュージュにとってみたら、それは快楽、と表現されるものであり、天国にいるような気持ちになる。

天国にいるような気持ちになるなら、血の気が引くのはおかしいだろう。が。

確実にリュージュの頭の血は下がっていた。

何故なら、罰と言われた時の搾精行為は、リュージュがヘトヘトになるほど濃厚だったからだ。

もう無理だ、と叫んでも精液を搾り取られ、薄い精液しか出なくなってくると、痛めつけられる。

痛みを快感として甘受してしまうリュージュは、あまりに強い刺激に失神寸前になってしまうのだ。

その刺激が、またリュージュの身に走ろうとしている。

「ば、罰をください……」

逆らうと、逆らわないでいる時よりも強い快楽に落とされてしまう。

そんなリュージュの恐怖心がターニヤにも伝わったのかもしれない。先程よりも柔らかな笑みをリュージュに向けてくる。

「自ら罰をして欲しい、って言うだなんて。貴方のマゾさ加減も馬鹿が付くほどね」

「……すみません」

『マゾですみません。この世に生まれてきて、すみません』って、手を使わずに、床におちんちんを擦り付けながら言ったら、罰をしてあげる」

「分かりました……！ マゾですみません。この世に生まれてきて、すみません」

うつ伏せになり、両手を背後に組むと、オムツを履いたまま芋虫のように、床に陰茎を擦り付けた。

リュージュは、どんなに酷いと思えるような要求にも、素直に応える。

それが、今まで培ってきたリュージュなりの対応だった。

「クスクス、いいわ。罰をしてあげる。それにしても、今の貴方の状況を見て笑いが込み上げてくるわ」

ターニヤのヒールが、リュージュの頭の上に乗る。

体重を掛けられたせいで、床に顔を擦り付けるような形になった。

「まるで芋虫のようだね。……ねえ、貴方は芋虫よね？」

「はいいいい！ 僕は芋虫ですううう！！ 色々な言葉でなじって、虐めてくださいいいい！！」

「聞きましたあ？ ターニヤ様あ。虐めて欲しいんですって♪」

「……とんだマゾ男ね。このド変態！」

ガッ

ターニヤの蹴りが、リュージュのオムツを履いたお尻にクリーンヒットする。

「いひやいいい！！」

べちゃつと床に突っ伏するリュージュ。

すると、さほど時間が掛からない間に、再度、ターニヤの足蹴りが飛んだ。

「なに休んでいるのよ！ 貴方は私の下僕なんだから休む暇なんかあるわけないでしょ！」

ゲシッ

「このド変態の、毛虫ヤロー！！ さっさとしな！！」

ドカッ

「……ひぐうっ……」

セサからも足で蹴られて、リュージュは唸る。

蹴られて、なじられて、クネクネと腰を振らせた。

ターニヤとセサのお尻を打つ行為は暫く続き、自分の股間を床に擦り付けるという倒錯的な行為に、リュージュはメロメロになってしまう。

「イっちゃう、イっちゃいますうううう！！」

不意に訪れた至福の時に身を委ねる。

でゆるっびゅくびゅくびゅく！！

オムツに堰き止められて、精液が浸み込んでいく。

温かい。動く度に湿った感触がリュージュを不快にさせる。

中がぐちゅぐちゅに蒸れた感じが最悪だ。

「……なあに？ こんなに簡単にイっちゃったの？」

ターニヤの呆れるような声が降ってきた。

ターニャは、足を組み、片肘を付いてリュージュを見下ろしている。

「あつという間過ぎて、面白くないわ。セサ、リュージュのオムツを脱がせて」

「はい、ターニャ様。お任せください」

セサはターニャに命令されて、リュージュのオムツに手を掛ける。

リュージュは、オムツの中がどんな風になっているのか簡単に予想が付いていたが、それを目の当たりにして、恥ずかしくなった。

「リュージュったら、こんなにたくさんさんの精液を出したの？」

「真っ白の粘液でぬるぬるしていますね♥」

セサは、オムツにこびり付いた精液を指先で弄ぶように触った。

「それにしても……。むせ返るような、このにおい！ リュージュ！！」

「は、はい……？」

いったばかりで微睡んでいると、急に名前を呼ばれる。

反射的に応答すると、ターニャがオムツを持ちながら、リュージュの前に差し出した。

「……イカ臭いのよ！」

「すみません」

「謝りたいと思ってるなら、このオムツに付いた精液を自分の体中に塗りたいくらいなさい！！」

「……え」

「私に逆らうの？」

「い、いえ……やらせてください」

リュージュは、ターニャからオムツを受け取ると、精液で濡れた部分を体に塗り始めた。臭い。しかし、オナニーで慣れ親しんだこのにおいは、嫌いじゃなかった。

それどころか、リュージュはこのにおいを嗅いで、興奮してきていた。

「なに、興奮してるのよ」

ギクリ。不意にターニャに指摘され、身体が硬直する。

リュージュの身体は、本当に素直なもので、興奮すれば勃起する。それは、自然なことだった。

現に今も、オムツに先程出したばかりだというのに、リュージュのペニスはムクムクと顔をもたげてきている。

ターニャは、それを見逃すことはなかったのだ。

「さすが、ド変態ね。オムツの精液を体中に塗って、勃起させるだなんてね」
声高らかに言って、鼻でフンと嗤うターニャは、とても愉しそうだ。

『オムツの精液のにおいが好きなんです』って、言ってみな？」

「オムツの精液のにおいが好きなんですう！」

「こんなにイカ臭いの？」

「こんなにイカ臭いの、好きなんですうう！！」

「ずっと嗅いでいたいんだろ、リユーヴ？」

「はい、ずっと嗅いでいたいですうう!!!」

セサにからかわれるように言われて、リユーヴは正直に答えていた。

「ずっと嗅いでいたいのなら、いい案があるわよ」

ターニヤの瞳がきらりと光る。

「リユーヴ、オムツに顔を埋めなさい」

「は、はいっ!!!」

身体に塗りたくっていたオムツを、今度は顔に近付ける。

うっ。臭気が直接鼻腔をくすぐり、思わずリユーヴは顔を背けそうになる。

だけれど、本当に顔を背けてしまつては、ターニヤにまた手酷い仕打ちを受けることになってしまう。

いくら痛みを快楽として受けるリユーヴでも、このままでは身が壊れてしまうかもしれない。

リユーヴは、顔をぎゅっと瞑つて、オムツに顔を埋めた。

「どう？ リユーヴ、最高に嬉しい？」

「はい、いい!!! すごく嬉しいですっ……!!!」

「嬉しいのなら、もっとオムツに顔を擦りつけなっ!!!」

セサに頭を片手で掴まれて、上下左右に振られる。

その度に、オムツに顔面が擦り付けられる。

オムツにべったり付いていた精液が、鼻に当たる。

リユーヴは、オムツに顔を埋めながら、床に男根を擦り始めた。

「……そんなじゃ、面白くないわ! オムツとキスするぐらい顔を近づけなさいよ! このウスノロ!!!」

ガツッ

ターニヤに足のつま先で蹴り上げられて、リユーヴは、ひゅっと息を呑んだ。

——いまにもイきそうだ。

性的興奮が高まっていたのに、更に痛みという刺激を受けて、リユーヴはまた射精しそうになってしまった。

臨界点も、すぐそこである。

「すみませんっ……もうイきそうです、イっていいですか？」

リユーヴが切羽詰まった表情を見ると、ターニヤはにんまりと笑った。

「そうねえ……『僕は精液のにおいを嗅いでイっちゃいます』って、大声で言ったら、イってもいいわよ♥」

『ほ、ぼくは……』

「声が小さいっ!!!」

『僕は精液のにおいを嗅いでイっちゃいますううう!!!』

「仕方ないわね、イっていいわよ♥」

そう言われた瞬間、心から解き放たれた。

びゅー　びゅる　でゅるるる

床にミルクを零したように、白い粘液が広がっていく。

「う、あ、んん、はああああ!!」

我慢していた分、いっぱい出てしまった。

「……明日は魔力祭よ。明日、精液が出なかったら困るから、今日はこのぐらいに止めてあげるわ」

素っ気ない態度で、ターニヤが言葉投げ掛ける。

「ターニヤ様、お優しいですう♥」

「そう？　育ちがいいからかしら？」

セサに褒められて、ターニヤは満足らしい。

二人がその場を後にした部屋は、静まり返っており、リュージュは短いため息を吐いた。

ターニヤが言っていたように、明日は魔力祭か……。

魔力が減り続けるマゾとして、出品されること――。

リュージュは留年が決定しているから、それ以外の事は考えなくてもいいのだ。

何ら問題は無い。

いつも通りにしていればいいのだ。

リュージュは迫りくる睡魔に意識を手放していった。

次の日。魔力祭だからなのか、周囲がかなり騒がしい。

目覚めたリュージュに暑い日差しが当たる。

「え」

薄っすらと目を開いて、状況を確認しようとして、リュージュは固まった。

すごい人だかりが、自分を囲っている。

焦って、周囲を見渡す。学校の校門や校舎が少し遠くに見える。

リュージュは、学校の玄関辺りに設置された特設ステージの上に居たのである。

リュージュの脇には、ターニヤが両腕を組みながらリュージュを見下ろしており、その隣ではセサが含み笑いをしている。

気付くと、リュージュは裸で外気に当てられていたせいか、鳥肌が立ち始めていた。

「皆様、お待たせいたしました！　今から、世にも珍しいものをお見せいたしましょう！」

ターニヤが見ている者達に向かって、笑顔で言い放つ。

ターニヤに目配せされたセサが続けざまに言った。

「この男は、搾精されても尚、魔力が下がり続けるマゾでございます」

普段とは違って、恭しくリュージュを紹介するセサに、恐怖心を感じる。

リュージュは、今、自分が置かれている状況と、リュージュに対する二人の対応に冷汗が出始めている。

しかも、公には一生隠しておきたいハズだったマゾだということを、こうもあっさりと大きな声で告げられてしまったなんて、思いもよらなかったのである。

「さあ、リユーヴ。皆様が一覧になっているのです。自分がどれ程マゾであるかお見せしなさい♥」

「……分かりました。まずは、何をすればいいでしょうか？」

恥ずかしさのあまり縮こまりそうになる意思を励ますように、ターニヤに聞く。
すると、ターニヤは待つてました、と言わんばかりに言った。

「そうねえ。まずは自慰をなさい。その間、お尻を叩いてあげるから。正常な意識の持ち主ならば、こんなに大勢に見られながら自慰をするなんて、出来ない筈よ。ね、セサ？」

「はい、ターニヤ様。もし、リユーヴが興奮したり、極限まで勃起させるようなら、それはマゾだという証にもなります」

二人の発言に再度、分かりました、と頷くとリユーヴは自慰を始めた。

絶対服従の君主。リユーヴにとって、ターニヤは、そう表現できるまでの存在となっていた。

リユーヴは、自身のマゾっぷりや、自分がこの世に存在していることさえも、申し訳なく思い、ターニヤに恐縮していたのである。

だからなのか、ターニヤの一言一句を慎重に聞き取り、それに応えて、機嫌を取りたかったリユーヴは、媚を売るように上目遣いでターニヤを見た。

ターニヤは、そんなリユーヴの気持ちを知ってか知らずか、優しい笑みをリユーヴに向けてくる。

「はあんっ！ ふっ、う、んんうっ……！」

恥ずかしい。だが、リユーヴは手淫する手を次第に激しいものにしていく。
竿の部分を手で包み上下に擦ったり、カリの部分に指を這わせたりする。

自分の好む形で、マスターベーションを愉しむ。
すると、ターニヤが露わになっているお尻を、力一杯叩いた。

「んぎやっ……！」

バシイッ バンッ バンッ

それは、一度で終わることなく、何度も続く。

「ふひやっ！ ギ、ぎもち、いいいい！！ もっとおお、もっとかだしいいい！！」

「ふふっ、ド変態ちゃん♥ そんなに欲しいなら、たくさんあ・げ・る♥」

バシッ バシッ バシッ ドカッ

最後は、ターニヤが履いているヒールの踵が入った。

「んぎいいいい！！ もう、もうっいきそうですっ！！」

リユーヴの口端からは涎が漏れ、焦点が合っていない。

「これに向かって、いきなさい」

ターニヤは、すかさずコップを用意して、リユーヴの股の間に置いた。

四つん這いになりながら、コップに向かって射精するのが難しくて、リユーヴが手間取っている、セサが手淫を手伝ってくれた。

それはまるで、牛の乳を搾るように、リユーヴの精液を尿道口まで搾るような仕草をする。

パンツ パンツ パンツ パンツ ぬちゅ ぬちゅ

「ぎやふううつ！ んああああ！！」

前と後ろで責められて、お尻がトロトロに蕩けそうな感覚になる。

限界はすぐにやってきた。

「イクっ、イっちゃいますううう！！」

「お尻を叩かれながら、イク時の顔皆様にお見せしなっ！！」

不意に頭の髪を掴まれ、前を向かされる。

びゅく んびゅく びゅびゅっ

その瞬間、わあっと歓声が上がった。



「さて、リユーヴ。貴方はいま、魔力がこれ以上下がりようのないところまで下がっているわ」

「……はい」

リユーヴは、自分が悪いわけでは無いのに、申し訳なさそうな表情を浮かべる。そんなリユーヴを見て、ターニャは嬉しそうに口を開いた。

「そこで問題よ、リユーヴ♥ どうすれば貴方の魔力が戻るでしょうか？」

「?? そんなこと出来るんですか？」

首を傾げるリユーヴに、セサがコップに入った精液を差し出した。

「……ま、まさか」

「そう。そのまさか、よ」

セサからコップを受け取ったターニャが、リユーヴの目の前に突き出す。

「射精した精液を飲めば…出した分だけの魔力は戻るわ」

その行動と言葉が、どういった意味があるのか、すぐに察知したリユーヴは後退りしそうになる。

「飲みなさい。次の射精も魔力をきっちり減らすためにも、少しは補給しなさい」

ターニャの指図に応えたいとは思う。だけど、それだけは……やりたくない。

でも、背後から、セサが見張ってる。

「なにより、精液も薄くなってきたわ。精液が濃くないと、見ている方が楽しめないじゃない。飲みなさい」

ターニャに何度も言われても指示に従わないリユーヴに、業を煮やしたターニャがセサにリユーヴの腕を背後から掴まえるように言った。

そして、リユーヴの口元にコップを近付けていく。

「の、飲みたくない……ぐっ、うえっ……」

ターニャは全部が口に収まりきるまで、コップを傾ける。

吐き出してしまいたかった。

だが、反抗すると後々の仕打ちが恐い。

リユーヴは苦しそうに目を瞑って、口の中に入った精液を嚥下した。

青臭い。しかも、ザーメンがこんなに苦いだなんて――。

自分の出した精液を飲んだことで、大衆の嘲笑が激しくなる。

観客席から、拍手が沸き立つ。

だが、見ている人の中には、気持ち悪い、という人もいた。

嘔し立てたり、蔑んだり、指をさして嗤ったり、リユーヴは恥ずかしさを超えて、居ても立ってもいられなくなってくる。

しかし、自分の精液を口にしてしまったリユーヴには、もう怖いものなど無い。

「セサ、またリユーヴに手コキしてあげなさい♥」

「はい、ターニャ様♥」

二人はアイコンタクトを交わす。

その後、セサにペニスを扱かれ、リユーヴに愉悦がやってくる。それから、何十回となくイカされた。

時間は、最低でも三時間は経っているだろう。

辺りが少し薄暗くなっている。

「リユーヴ、またイったわね♥ えーっと、18回目になるかしら？」

「いいえ、19回目です。ターニヤ様♥」

すかさずセサが訂正する。

「……あら、本当？」

「18回目は、近寄って来た観客に、リユーヴが掛けちゃいましたよねえ♥」

「ああ！ そういえばそうだったわね♥」

セサとターニヤが会話を花を咲かせている。

「リユーヴは、ちゃんと数えていたかしら？」

急に、その話題がリユーヴに振られる。

「はあはあ……わ、かり、ませ……」

荒い呼吸を繰り返すリユーヴ。言葉が途切れ途切れになる。

リユーヴには、もう数えていられるような余裕さえ無い。

苦しい。辛い。でも、気持ちがいい。

混濁した意識が、リユーヴの脳内を行ったり来たりしている。

リユーヴは涙を流していた。

その涙は、嬉し涙なのか、はたまた悲しい時に流れる涙なのか……。

それを知っているのは、リユーヴのみである。

「リユーヴ、私の靴に服従のキスをしなさい」

「分かりました」

今度は一切の抵抗を見せることなく、リユーヴがターニヤの靴に口付ける。

それは、先程、反抗的な気持ちになっちゃった自分を戒めるかのような光景である。

「そうよ、リユーヴ。私には絶対に逆らわないことね」

「もう逆らいません、ターニヤ様」

何度も靴にキスをするリユーヴに、気を良くしたターニヤが言った。

「リユーヴ、卒業しても私達の関係は変わらないわ♥ ずっとずっと大事にしてあげるからね♥」

「……はい」

ターニヤの言葉に、リユーヴはそっと頷くのだった。



★企画★

サークル…妖精社

【メールアドレス】

munitednovel@gmail.com

★制作協力★

sinzan様 (CG描画)

【HP】

http://blog.livedoor.jp/sinzancellfor/

【pixiv】

http://www.pixiv.net/member.php?id=13413

【Twitter】

https://twitter.com/cellfor

夢廻あくい様 (小説担当)

【HP】

http://yumenoaakuy.fc2.com/

【pixiv】

http://www.pixiv.net/member.php?id=91322

92

【Twitter】

<https://twitter.com/sevens19>

◇◇◇アンケート◇◇◇

当サークルは、読者様から広くご意見・リクエスト等を募集しております。
どんなことでも結構です。

アンケートにお答え頂いた方には、御礼のCGを2点送信させていただきます。

次回作以降の参考にさせていただきます。

以降の定型文を埋める形で送っていただけると幸いです。

次回作の参考にさせていただきます！

《メール返信用アンケート》

作品名…魔法学校のエリート【搾精の罌】

Q1【この作品を何処で知りになりましたか？】

Q2【ダウンロード（購入）のきっかけは何ですか？】

Q3【お気に召しましたシーンはございましたでしょうか？ それはどのシーンでしょうか？】

Q4【今後こういう作品が見たい等のリクエストやご意見があれば何でも、お気軽にお申し付け下さい】

（ナース2人に囲まれて足コキで射精させられ、笑われる…等）

メール送信先…munitednovel@gmail.com

Special Thanks to

スパンキングの魅力 僕のお尻にお仕置きを 様



<http://spankingfm.blog13.fc2.com/>

マゾヒストの喜び 様

<http://kazowk.com/>

M男な二次作 様

<http://monanizisaku.blog.fc2.com/>

エロ同人NAVI 様

<http://dnavi.eromoe.com/>

DL同人観測所 様

<http://dlldojin.blog28.fc2.com/>

symats, Forced Feminization Stories (強制女性
化小説・情報) 様

<http://ffftgmania.blog95.fc2.com/>